

別紙（事後評価書）

平成 30 年度文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）

通し 番号	2	<p>事業分野：共同制作支援事業</p> <p>助成対象団体名：公益財団法人神奈川芸術文化財団</p>
<p>助成対象活動に関する評価</p> <p>（妥当性）</p> <p>幹事館として神奈川県民ホールが経費の取りまとめ、出演団体との交渉（札幌交響楽団除く）等を行い、他の各館は、各館での実施に係る業務（合唱団の手配、交通宿泊、広報宣伝、制作発表会等）を行うなど役割分担を行うことにより業務負担の軽減を図るなど共同制作の意図を踏まえた活動を行っていたと認められる。</p> <p>壮大な規模の「アイダ」それに加え故マウリツィオ・ディ・マッティア原演出のものを日本初演の公演を地方で行うことは、上演地域及びその周辺の文化の活性化に効果があると認められ、上演機会の少ない地域でこれらを行うことは助成に値する文化的、社会的意義等があったと評価できる。</p> <p>（有効性）</p> <p>各指標については概ね達成されており、オペラ鑑賞者の裾野拡大や、オペラへの興味・関心の促進、社会への話題性の提供などの目標は、概ね達成したと認められる。</p> <p>（効率性）</p> <p>事業はほぼ計画通り実施されており、事業期間は適切であったと認められる。また、当初の収支予算に対して収支決算では一部の費目に増減があったものの、助成対象経費はほぼ計画通り執行されており、事業費も適切であったと認められる。</p> <p>（創造性）</p> <p>当該「アイダ」は、ローマ歌劇場のプロダクションで、演出家ジュリオ・チャバッティ（原演出はマウリツィオ・ディ・マッティア）とデザインチームが来日し、指揮者にはオペラで評価の高い A. バッティストーニを起用し、極めてイタリア色の濃い舞台となった。</p> <p>神奈川公演では、バッティストーニの指揮は幾分早めのテンポで小気味よく音楽を進行させ、ダイナミクスも十分で、静と動の対比が見事に表現した。</p> <p>ソリストや合唱は、この作品の魅力を伝えるだけの表現力を発揮し、指揮者の音楽的な要求によく応えたオーケストラの好サポートを受けながら、国際的なレベルの極めて質の高い演奏を繰り広げた。</p> <p>一方、演出は極めてオーソドックスであったものの、この作品の見せ場である 2 幕 2 場「エジプト軍の凱旋の場」では、このプロダクションがバレエに重点が置かれた演出の為、合唱とアイダトランペットの扱いがやや平板で、若干物足りなさが残った。しかし幕切れの地下牢の場は主役二人の歌唱力にも支えられ、十分に見ごたえのあるシーンとなった。</p> <p>全体としては、イタリアオペラを彷彿とさせる舞台となっており、高い芸術水準を概ね達成した公演であったと認められる。</p>		

別紙（事後評価書）

札幌、神奈川、兵庫、大分で実施された4ホール合計6回の公演は何れもほぼ満席で、来場者アンケートによる満足度は4ホール平均で87.9%という高い水準の結果を得ている。4ホールの国内における評価の向上に一定程度つながったものと認められる。

（総 評）

当該共同制作「ヴェルディ作曲 オペラ『アイーダ』」は、妥当性、有効性、効率性、創造性において概ね適切であったと認められる。